

第 18 回「咄の会」 (落語)

日 時：2015 年 2 月 6 日 (金) 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：三遊亭日るね (落語協会二ツ目)

演 目：『あたま山』『権助魚』

参加者：41 名

懇談会：「狸穴 Cafe」(参加者：日るねさんを含めて 10 名)



前日の雪が嘘のような好天に恵まれ、参加者は 41 名と前回に並ぶ最高タイ記録。女性噺家さん初登場のせいか女性が 11 名で、こちらは文句なしの過去最高記録です。出演者は世話人代表と同じ三重県出身の三遊亭日るねさん。『中沢家の人々』で知られる三遊亭圓歌師匠の一門で、三遊亭歌る多師匠の三番弟子。2013 年 6 月に二ツ目になったばかりというフレッシュな噺家さんです。

「伊勢津」の出囃子で高座に上がった日るねさんは、まず自分の失敗談や名前の由来、圓歌師匠のこと、美声の歌声などで聴衆を惹き付け、お馴染みの与太郎咄や、鯛・篩・古金の小咄で笑いをとってから、ネタ出しの『あたま山』に入りました。桜んぼを種ごと食べた吝兵衛さん、頭から桜の木が生え、大勢の人が頭の上で花見三昧。抜いてしまったら跡が池となり、今度は釣り船やら花火やらの大騒ぎ、とうとう頭の池に身を投げて死んでしまったという、実に奇想天外なストーリーです。日るねさんによると、この噺を聴いて笑うのは頭の良い人だけだそうです、さすがに「咄の会」メンバーは大いに笑っていました。原話は安永 2 年 (1773 年…十代将軍家治、田沼意次が老中だった頃です) の小咄集に見られるそうですが、その下敷きには徒然草の「堀池の僧正」があるともいわれています。久保田万太郎がこの噺を好み、それを得意とした八代目林家正蔵 (彦六) によくリクエストしたそうです。

中入り後は出囃子が「桑名の殿様」に変わり、『権助魚』を明るく演じていただきました。旦那が妾宅に通うのを、妻女が飯炊きの権助に 1 円与えて後をつけさせるのですが、旦那に勘付かれ、2 円もらって寝返った権助が山家育ちの悲しさで大失敗する噺。権助は『権助提灯』『権助芝居』その他多くの



落語に登場する立役者の一人ですが、大店で下働きをする下男

の通称で、越後や信濃などから出て来た人が多かったようです。噺の後、聴衆の手拍子をバックに南京玉すだれの伝統芸をたっぷり演じ、サービスに「アナと雪の女王」のテーマ曲に合わせた妙技も披露して、大喝采を浴びました。南京玉すだれは、南京という名前にもかかわらず、純国産の大道芸で、富山県東礪波 (となみ) 郡平村で生まれたとされています。

トークコーナーでは、日るねさんが大好きな猫の話や、前座時代の失敗談などが披露され、明るい笑いが絶えませんでした。また懇談会は昨年開店したばかりの「狸穴 Cafe」で行い、いつもながらの談論風発、楽しいひと時を過ごしました。

第17回「咄の会」 (落語)

日時：2014年12月5日(金) 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：桂 歌助 (落語芸術協会真打)

演目：『小間物屋政談』『竹の水仙』

参加者：41名

懇談会：「鈴や」(参加者：歌助師匠を含めて7名)



この日は好天に恵まれ、参加者は41名とこれまでの最高記録です。本会3人目の真打である桂歌助師匠の出演は、鎌倉淡青会長の梅田健次郎さんのご紹介により実現したものです。残念ながら梅田さんはお身体の具合で参加いただけませんでした。師匠から一席目の冒頭で梅田さんと師匠との関係をお話いただきました。梅田さんが新潟県十日町市の(株)当間高原リゾート初代社長として十日町市に在住された時、十日町市の出身である師匠と家族ぐるみの交誼を結ばれたとのこと。

一席目は『小間物屋政談』。相生屋小四郎という背負小間物屋が、商いのため京に上る道すがら箱根の山中で人に親切をしたのがもとで、思わぬ偶然から旅先で病死したものと勘違いされてしまいます。久しぶりに帰った我が家では幽霊扱いされた上、器量良しの女房は従弟と再婚していて、生きて戻った小四郎より従弟の方を選ぶという始末。行き場を失った小四郎は、恐れながら奉行所に訴え出ます。裁くのはご存じ大岡越前守。小四郎が箱根で助け、小田原で病死した若狭屋甚兵衛の後家と添うて、その身代を継げというお裁き。惚れた女房に未練を残してためらう小四郎ですが、後家さんを一目見れば絶世の美人、身代は三万両と聞いて二つ返事で承知し、皆が幸せに落ち着くという嬉しい噺。

二席目は『竹の水仙』。無一文のまま神奈川宿のとある宿屋に泊った左甚五郎、宿代の代りに竹で水仙を拵えます。水を吸って朝日を浴びると蕾がぱっと開くという稀代の名作。通りかかったのが肥後熊本領主細川越中守。さすがに目が高い。甚五郎の作と見抜いて家来を求めに走らせます。家来は値段に驚き買わずに帰りますが、殿様に叱られ、飛んで戻って三百両で入手します。一文無しの風来坊が高名な甚五郎と知り、百五十両の大金を手にした宿の亭主も大喜びという噺です。



二席とも旅が絡む噺ですが、東海道を一人旅し、すべての宿場で落語を演じたという歌助師匠ならではの味わいをたっぷり楽しむことができました。その後の参加者とのトークタイムでは、参加者側から鎌倉淡青会における梅田さんの活躍ぶりもあれこれ披露されました。その他寄席文字についての質問が出たり、噺家の身分制度についての解説があったり、和やかな雰囲気うちに時間いっぱいまで楽しいやりとりが続きました。

懇談会は例によって「鈴や」で。師匠を含めて7名、いつもより小人数でしたが、その分会話の密度が高く、時の移るのを忘れて四方山話に興じました。

番外編（9） 東大ホームカミングデー <東大落語会寄席>

日 時：2014年10月18日（土）12:00～17:30
 場 所：東大本郷キャンパス法文一号館二十一番教室
 出演者・演目：下図
 鎌倉淡青会参加者：3名+アルファ
 （短時間だけ立ち寄った人の数は未詳）



ホームカミングデー恒例の東大落語会寄席は、「咄の会」が発足してからは3回目になり、番外編（9）としてご案内しましたが、広い会場で出入りも多いため、会員が何名来場されたか正確には把握していません。

下に示した13名の出演者のうち、黄色のマークをつけた5名の方がすでに「咄の会」に出演していただいています。このほか今回は後進に高座を譲ったベテラン2名も来演済みですので、過去の出演者は計7名になります。東大落語会（落研OBの会）あつての「咄の会」といってもよいでしょう。

その東大落語会の面々が腕を競うこの落語会は、第6回「咄の会」に出演していただいた藤井隆さん（上の写真）が幹事となって運営されています。出演者は自主的に稽古に励むのは勿論ですが、7、8、9月と3回にわたり合同稽古会を行ったとのこと。その熱心な切磋琢磨の成果として、今年も皆さん本当に素晴らしい噺を聴かせてくれました。黄色マークのついた方々の芸はすでに「咄の会」でも十分実証済みですが、その他の方々もいずれ劣らぬ好演でした。また、古典落語が大勢を占める中で、南家御前さんが自作の新作落語で楽しませてくれたのは特筆に値するでしょう。

今後も多士済々のメンバーを次々と「咄の会」にお招きするのを楽しみにしています。

午後五時開演予定 幾代緋 風呂家 さん助 (藤井)		宿屋の窓 晴ね家 きりすと (駒形)		黄金緋 ハルツ亭 源内 (平賀)		禁酒番屋 宮亭 大興 (正)		池田の 猪買い 和蘭亭 南坊 (首藤)		寝赤 春風家 因留変 (萩原)		午後二時三十分頃 巖流島 二山亭 多楽 (十時)		教科書に かける情熱 南家 御前 (能美)		長短 徳如亭 艶満 (鞠子)		厩火事 愛子亭 朝大 (家富)		時そば 於家 馬亜 (佐藤)		悟翁の独楽 東中亭 どろ珍 (荒瀬)		堀之内 駒亭 志舞 (渡辺)		演 目 午後五時開演
---------------------------------	--	-----------------------	--	---------------------	--	-------------------	--	---------------------------	--	--------------------	--	--------------------------------	--	-----------------------------	--	-------------------	--	--------------------	--	-------------------	--	-----------------------	--	-------------------	--	---------------

第16回「咄の会」 (落語)

日時：2014年10月3日(金) 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：家富恒志(愛子亭朝大 東大落語会)

演目：『権助芝居』 および『しわいや』の一部

参加者：25名

懇談会：「鈴や」(参加者：家富さんを含めて8名)



今回は東大落研 OB、昭和40年法学部卒の家富恒志さんをお招きしました。学生時代から愛子亭朝大を名乗り、今もその名に青春の思いを残して、年十数回も高座に上がるという根っからの武闘派です。

今日の出しものは『権助芝居』。素人芝居で皆が勘平をやりたがり、幕をあけたら36人も勘平が並んでいて、「これはおおかた観兵式でしょう」というお馴染みの小咄から入り、小圓朝直伝という楽しい噺をみっちり聴かせていただきました。素人芝居に駆り出された飯炊きの権助、宝蔵から御鏡を盗み出す非人の権平という役を務めることになったのですが、田舎の地芝居では名うての役者だったという自慢の割には、芝居と現実との区別もつかぬ体たらく。さんざん周囲を困らせた挙句、「さあ誰に頼まれて盗みに入ったか、きりきり白状せい」と痛めつけられ、苦し紛れに「番頭さんに五十銭貰って頼まれた」という間抜け落。同じ噺で舞台を江戸時代とし、「一分貰って頼まれた」とサゲる演じ方もあり、その場合は『一分茶番』といいます。噺の中で演じられる芝居は『有職鎌倉山』で、期せずして鎌倉にご縁があるものでした。(元になった史実は天明4年の田沼意知暗殺事件で鎌倉とは関係ありません)芝居を題材とした落語は数多くありますが、江戸から明治にかけて芝居見物がいかにポピュラーな庶民の娯楽となっていたかよく伺えます。元の芝居を知って落語を聴くといっそう楽しみが増すでしょう。

中入り後は、学生時代に教わった飯島友治先生や三遊亭小圓朝師匠の思い出から始まりました。師匠から直接教わった噺は『権助芝居』と『転失気』の二席。最初はただ言葉を覚えてそのまま喋ればよい



と思っていたのが、実際に演じてみると、上下のきりかた、登場人物の位置関係の表現、扇子や手拭の扱い方など、実に奥深いものがあることに気付き、ますます深くのめりこんで行ったとのこと。卒業後はずっと高座から遠ざかっていたのが、ほぼ30年ぶりに復帰して大喝采を浴びて以来、欠かさず演じ続け、今携わっている「健康いきがい作りアドバイザー」の仕事にも取り入れて活用しているとの由。最後に『しわいや』をサワリの部分だけ演じていただきお開きとなりました。

恒例の懇談会は「鈴や」で行い。全部で8人集まりましたが、その中に家富さんの知己も2人いて、遅くまで話に花が咲きました。

番外編（８） 寄席巡りーその４

日 時：2014年8月24日（日） 11:40～16:30

場 所：新宿末廣亭

出演者：柳亭市馬（トリ）ほか

参加者：9名

懇談会：「新宿ライオン会館」1階（参加者：8名）



寄席巡りも回を重ねて4回目となり、今回は「新宿末廣亭」を9名で訪れました。明治30年にこの地に開場した末廣亭は浪曲の定席でしたが、戦災で焼失し、昭和21年に当時建築業者だった北村銀太郎が、落語や色物の定席として再建したものです。その後北村は落語界の大旦那として重きをなし、昭和58年に亡くなったあともその子孫が席亭を継いでいます。

この日は日曜日のせいか、開場前から上の写真のように数十人が列を作り、中入り前には両側の栈敷や二階席までいっぱいになる大盛況でした。お目当ての一人だった春風亭一之輔が抜けて、古今亭志ん陽が代演を務めた外は予定どおりのメンバーで、なかなか充実した顔ぶれです。

出演順に演者と演目を記すと、入船亭ゆう京（前座）『狸賽』、柳亭市江（二つ目）『権助魚』、ストレート松浦（ジャグリング）、三遊亭歌武蔵『犬の目』、夢月亭清麿『東急駅長会議』、ホンキートンク（漫才）、古今亭志ん陽『垂乳根』、柳亭左楽『目薬』、林家正楽（紙切り）、金原亭駒三『親子酒』、柳家権太郎『代書屋』、三増紋之助（曲ごま）、三遊亭円丈『ランゴランゴ』 —中入り— 柳家小三太『金明竹』、すず風 にゃんこ 金魚（漫才）、柳家小里ん『へっつい幽霊』、柳亭小袁治『千両蜜柑』、アサダ二世（奇術）、柳亭市馬『笠碁』といった具合です。

先代小さんの『笠碁』は絶品でしたが、その直弟子である市馬も師匠に迫る好演でした。「碁敵は憎さも憎し懐かしし」という言葉どおりの複雑な心理を表現する巧みさには、参加者一同大いに堪能しました。中トリで登場したのは新作派の大御所三遊亭円丈。自作の『ランゴランゴ』は安いギャラで出演してくれる噺家を探すところから始まる噺で、日頃「咄の会」の低額出演交渉をしている世話人としては、身につまされます。でもやはりアフガニスタン出身の新米噺家というのは敬遠しますね。円丈のハチャメチャな語り口には、もうすぐ古希を迎える噺家がこれだけのエネルギーを発揮できるものと驚かされます。新作といえば夢月亭清麿もやはり自作の『東急駅長会議』で新鮮な笑いを呼びました。



そのほか大勢の出演者が、それぞれの個性と技量に応じた芸を披露してくれ、たっぷり5時間近く楽しめました。これで2700円は安いね！とはある参加者の率直な感想です。

終演後入口の前で記念撮影したのが上の写真。この後新宿駅近くのピアホールに立ち寄り、短時間でしたが騒々しい店内で四方山話に興じました。

第15回「咄の会」 (落語)

日時：2014年8月1日(金) 14:30~16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：柳家ろべえ(落語協会二つ目)

演目：『あくび指南』『妾馬』

参加者：35名

懇談会：「鈴や」(参加者：ろべえさんを含めて10名)



「四万六千日、お暑い盛りでございます」という、あの『船徳』の名フレーズがつい思い出されるような暑い日でした。今回はなんと延べ47名の申込み(過去最高!)があったのですが、水銀柱が上がるにつれて参加者数は下がり、当日会場に集まったのは35名でした。それでも本会史上4番目の大入りです。

柳家ろべえさんは、独特の語り口で人気の高い柳家喜多八師匠の一番弟子。東京農工大で物理を専攻したという異色の噺家さんです。「外記猿」の出囃子に乗って高座に上がると、まずご自分の名前の由来から。喜多八の相棒は弥次郎兵衛だが、それを半分にして「ろべえ」、お客様からヤジをいただければ、弥次郎兵衛になりますと笑わせ、さらに幾つかの小咄で聴衆の反応を確かめながら入った噺が『あくび指南』。この噺としては最も一般的な「夏のあくび」バージョンです。若くて美人のお師匠さん目当てに飛び込んだのに、勿体ぶった男の師匠とあって教わる方は上の空。頓珍漢な稽古風景が面白い。付き添ってきた友達の方が退屈のあまり思わずあくびをもらしたのを見て、「あーお連れさんはご器用だ、見ていて覚えなすった」というのがサゲ。いくら江戸時代だって、まさかあくびの指南をするところなんぞある訳がない。そのある訳がないところを、いかにもあるように聴かせるのが噺家の技量であり、また落語の醍醐味というものでしょう。

中入り後の二席目は、これはもう落語のスタンダードナンバーともいえる『妾馬』(めかうま、別名『八五郎出世』)でした。がさつな職人の八五郎、鷹揚な大身の殿様、律儀な三太夫、面倒見の良い大家など、多様な人物の性格をきっちりと描き分け、滑稽なやりとりの中にも親子兄妹の情愛をさりげなく(臭くならないように)描き出すには、なかなかの手腕を要する噺です。



二つ目とはいえ練達のろべえさんは、この難しい二席を自分流の工夫を凝らしながら見事に演じていただき、聴衆から大きな喝采を浴びました。その勢いで、対話コーナーでも参加者から質問やコメントが続出し、外の暑さに負けない熱気のこもったやりとりが時間いっぱいまで続きました。その中で、故桂文朝師匠に憧れていて、師匠と同じ『外記猿』の出囃子を使いたかったが、遠慮してその元の長唄の中から別の部分の節を選んで用いている。したがって同じ『外記猿』とはいえ師匠のとは節が違うというお話を伺いました。こんなところにも、ろべえさんの人柄を知ることができます。

例会が終わった後は、いつものお店でいつものように、有志9名がろべえさんを囲んであれこれ歓談し、やっと涼風が戻ったころ家路につきました。

第14回「咄の会」 (落語と解説)

日時：2014年6月6日(金) 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：首藤龍廣氏(高座名＝和朗亭南坊 東大落語会)

演目：『胴乱の幸助』＋上方落語についての解説

参加者：36名

懇談会：「鈴や」(参加者：首藤氏を含めて14名)



「咄の会」初めての雨となりましたが、予定どおりの36名が集まり、会員の熱意のほどが示されました。今回の出演者は、東大落語会武闘派の中でも、上方落語にかけてはこの人をおいてないという首藤龍廣氏で、昭和59年文学部卒の現役サラリーマン。この会のためにわざわざ休暇をとって来演いただきました。生まれも上方なら、勤務先もつい少し前までは上方であったとのこと。「わろうてなんぼ」という高座名も上方ならではの趣があります。

『胴乱の幸助』も上方色豊かな噺の一つで、腰に胴乱(がま口を大きくして紐をつけたようなもの)をぶら下げて喧嘩の仲裁に歩くのが何よりの道楽という幸助が、浄瑠璃の稽古屋で洩れ聞いた嫁いびりを本当の話と勘違いして、はるばる京都まで出かけるという筋立てです。登場人物も多く、浄瑠璃も入るといふ難しい噺ですが、文字通り流汗淋漓の大熱演、40分以上かけて演じ切った後は、高座着の襟元から背中一面にかけて汗びっしょり。すっかり世間知らずの隠居になり切った快演は、会員の中から「本職の噺家さんより上手いくらい」という賛辞も出るほどでした。



中入り後のお話は、「上方落語の空間」と題して、Ⅰ.『胴乱の幸助』の舞台 Ⅱ. お伊勢参りと上方落語 という2部構成。

Ⅰ. では、噺の中に登場する八軒屋とか、柳馬場押小路虎石町の西側とかいった地名が、実際に今の地図ではどのあたりになるのかといった説明から、琵琶湖を出て大阪湾に注ぐ河川の名称の場所による変化や、時代とともに河川の形が変わってきた様子などに及び、さらにはこの噺の題材になった浄瑠璃『桂川連理柵(かつらがわれんりのしがらみ)』の筋書に至るまで、幅広い蘊蓄を傾けていただきました。

Ⅱ. では上方落語の「旅ネタ」の中でも代表的な東の旅『伊勢参宮神乃賑』について、広重の浮世絵を交えながら詳しく解説していただきました。また落語でもよく知られた三十石舟についての紹介もあり、その船頭が歌う舟歌を三遊亭圓生の録音で聴きました。

懇談会は総勢14名、止みそうにもない雨を気にしながら、いつもの「鈴や」で和気藹々と。今回は初参加の方も多く、全員が自己紹介しあうというオマケつきでした。

第13回「咄の会」 (落語)

日時：2014年4月4日(金) 14:30~16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：四代目三遊亭萬橋 (五代目円楽一門会真打)

演目：『真田小僧』『火焰太鼓』

参加者：33名

懇談会：「鈴や」(参加者：萬橋師匠を含めて14名)



2012年4月12日に第1回「咄の会」を開催してから早くも2年の歳月が流れました。そこで今回は、開設2周年を記念して、東大落語会とご縁の深い四代目三遊亭萬橋師匠をお招きしました。

一席目は『真田小僧』。こましゃくれた子供に大人が手を焼くのは落語の一つのパターンですが、この主人公はなかなかの知能犯で、父親がまんまと一杯喰わされてしまう様子がとても面白く描かれました。最近ではむしろそれが普通のようなのですが、萬橋師匠も後半をカットしたため、題名の由来がわからなかったかも知れません。後半に興味のある方はYouTubeで(音声だけですが)三代目金馬や圓生などを聴いてみてください。二席目の『火焰太鼓』は、志ん生の演出を土台としながらも、萬橋色の濃いクスグりを随所にちりばめながらの大熱演でした。何度聴いても楽しい噺です。

二席終わったところで、山本進さんに萬橋師匠との関わりや、その名跡についてお話しいただきました。山本さんらが活動された東大落語研究会で、昭和20年代以来長らく落語を指導していただいたのが三代目三遊亭小圓朝師匠(1892 - 1973)です。2012年12月の第5回「咄の会」では、田頭さんから当時の映像を交えて懐かしい思い出話を語っていただきました。その小圓朝師匠の三番弟子が六代目三遊亭圓橋師匠、その二番弟子が今回招いた四代目三遊亭萬橋師匠です。2013年3月の真打昇進・萬橋襲名に際し、小圓朝師匠への恩返しの心を込めて、東大落語会から萬橋師匠に幟が寄贈されました。



「萬橋」の名跡については、明治十年代半ばに東都の寄席を席卷した「珍芸四天王」の一人「へらへらの萬橋」が初代。その後二代目、三代目(1937没)と音曲系の噺家が続きました。四分の三世紀も途絶えていた名跡を復活して、昨年四代目萬橋が誕生した裏には、山本さんの強い勧めがあったとのこと。

終演後の懇談会は、このところすっかり定番になった「鈴や」で開催。総勢14名という賑やかな会で、萬橋師匠と山本さんにも最後まで出席いただきました。左利き揃いの参加者が大いに盛り上がる中で、萬橋師匠ひとりが終始ウーロン茶でお付き合いいただいたのは、何とも申し訳ない次第でしたが、真打の噺家さんと膝を交えて話すという得難い機会を十分満喫できました。